

在宅医療 interviews



ご自由にお持ちください

在宅医療を深く知る



在宅医療を深く知る

在宅医療の世界を皆さまにご理解いただくための広報誌の第4号です。この地域で在宅医療に取り組みたい方々にお話を伺いました。仕事のことからプライベートまで詳細に語って下さいました。

道程

— 医師になるまでの道のりは

「母が小児科医でした。実家の診療所は毎日子どもでにぎわい、泣き声のない日はありませんでした。私が小学4年生のある日、とても楽しそうな声が診察室から伝わってきたので覗いてみると、病気が治ったお子さんの親御さんと母が喜びあっている光景でした。患者さんの笑顔が母にとってこれ以上ないご褒美のようで、とてもやりがいのある仕事だと思えて、自分も医者になるうと思つたと記憶しています。」

診療

— 在宅医療をはじめられたきっかけは

「娘が内科医をしています。彼女が東京にいた頃、在宅医療を熱心に取り組まれている医師の下で仕事をしていました。娘から在宅医療はとても面白くやりがいのある分野だと聞いており、私自身もいつか携わってみたいと思つていました。また、最近では眼科医の専門雑誌でも眼科医が在宅医療にいかに関わるかという特集を目にする事が多くありました。いよいよ取り組む時期が来たと思いましたが、眼科は精密機器を駆使する診療なので、はたして診察室を出て診療ができるものかと不安もありました。しかし、医学光学技術の進歩によって携帯できる機械が作られていることを知って、診療の心配は解決できました。在宅医療について何ができるのかはわからなかったのですが、あとは度胸を決めて飛び込んでみました。」



耳鼻咽喉科医である大原 栄医師とともにクリニックでの診療にあたられている

— 何名のお宅に訪問していますか

「もともと当院の外来を受診をされている方で、通院が難しくなった2、3名の元に訪問しています。」

— 訪問するようになった感想は

「眼科医ですので在宅医療を専門にされている内科の先生方のように24時間対応しながら最期を看取ることはできません。献身的にかかわられている先生方に眼科領域からのサポートができればと意識しています。眼科診療では通常、診察台をはさみ患者も患者さんも座っているのですが、在宅では患者さんが布団に寝ていることが多いです。皆さんには当たり前かもしれない

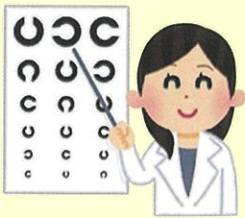


おおはら
大原
れい
麗
医師

大原クリニック

台湾台北生まれ、昭和51年慶応義塾大学医学部卒業。厚生連塩谷病院10年間の勤務をへて、昭和63年に耳鼻咽喉科医の夫とともに大原クリニックを開業、現在に至る。

在宅医療を支える医師の素顔をおとどけします
The doctor's natural face



けれど、それがすごく新鮮さを感じました。毎回、訪問するたびに、患者さんなどのような表情をしているのか、良くなつたかなどを考えるとわくわくしています。また、訪問用の診察道具は体の不自由な方の外来診療にも応用できることを知るなど、いろいろな新しい発見がありました。在宅医療を紹介してくれた娘も私が訪問しはじめたことをとても喜んでくれています。」

「とくに印象に残った出来事はありますか？」

「目の状態がなかなか良くならない患者がいると他の医師から相談を受けて訪問した方がいました。目薬を処方したのですが、つぎに診察した時、眼



在宅医療をはじめるとあって新たに携帯できる医療機器を購入された



戸惑いのあったベッドでの診療も回数を重ねるごとに慣れてきたとのこと

球が見えない程まぶたが腫れてしまいい、原因を探ってみると、目薬の差し方に問題がありました。その方は目薬を何滴もさして、すぐ拭き取らずにそのままにしていたのが原因でした。あらためて差し方をお教えしたつもりですが、長年の習慣になつていて直すのは難しいのではないかと判断し、薬の種類を変え、差す回数を減らすよう工夫してから改善することができました。患者さんやご家族からも信頼をいただいたようで、今後も担当してほしいとおっしゃっていただけました。自分の専門分野が役立てることがあり、在宅をはじめてよかったと感じました。」

「他職種と連携されることはありますか？」

「まだありません。視覚や視野の障害の方は日常生活や点眼薬の種類などに工夫やサポートは必要不可欠ですので、今後訪問看護師さんなどと連携をしていきたいと思っています。」

「在宅医療に携わる医師はどうしたら増えるのでしょうか？」

「眼科においても在宅医療への関心は高まっているようですが、まだどのように役割分担をする、あるいは、した方がよいのかは在宅分野ではなかなか実感できません。私も娘が在宅医療に関わっていなければまだ他人事だと思っていたかもしれない。」

余暇

「プライベートでの過ごし方は？」

「仕事の合間をぬってさまざまなおにりに取り組んでいます。俳句をはじめ3年たちまりましたが一向に上達しません。体を動かすことも好きです。以前は水泳とウォーキングに取り組んでいたのですが、このところは孫と一緒になわとびをしています。植物の世話も好きです。月下美人という年に4時間しか咲かない珍しい花を30年前母から



30年前にお母さまから送られた月下美人を大切に育てられている

もらいました。毎年必ず咲かせるように頑張っています。一気に7つも咲いてくれた年もあります。音楽はクラシックを好んで聞いています。在宅医療も含めて人生いろいろやるのが多くて暇という時間はありません。」



大原クリニック

東三島3-67

0287-37-1133

<https://nttbj.itp.ne.jp/0287371133/>

道程

—医師になるまでの道のりは

「父が眼科医なので医師は子どもの頃から身近な職業でした。休日も毎朝回診に行き、夜中もポケットベルで呼び出されていく姿を見ていましたから、人の役に立つ大切な仕事なのだと憧れていました。幼稚園のアルバムには、既に将来の夢は『ピアニストと医者』と書いていました。練習が好きではなかったのでピアニストの夢は早々

に諦めました。小学生の時は女性のためになる産婦人科医に、高校生からはアトピー性皮膚炎に悩んでいたので皮膚科医になりたいと思っていました。大学に入ってから精神科や救急医療、形成外科などに興味を持ち目移りしっぱなしでした。」

—医師になられてからの道のりは

「結局、大学を出てからは外科医となりました。手術をしてなんでも治せるのが格好いいなど。しかしそんな中で、高齢者の手術をしたのはいいけれども、弱って動けなくなり、ご飯も食べられないからチューブがついて、チューブを抜いてしまうからと手足を縛られて、ついにはそのままお亡くな

診療

—在宅医療に携わってどの位ですか

りになるという光景を見ました。なぜ人生の最期になってこんなつらい思いをしてお亡くなりにならなくちゃならないのだろうと感じていた時に、在宅医療のテレビ番組を見て在宅医療に興味をもちました。」



診療所と併設するほほえみ訪問看護ステーションのスタッフのみなさん

—在宅医療はやりがいがありますか

「とても楽しいです。患者さんの生き方や考え方を教わり、それを取り囲む家族の気持ちをうかがい、病状をコントロールしながら生活を整えていきます。経済力や人手や住環境など、誰でも不足があるのは当たり前。専門職が考える常識を押し付けるのではなく、その人らしさ、その家族らしさを大切にして伴走する。私の最後の勉強にもなります(笑)。」

黒崎 史果 医師

菅間在宅診療所



岩手県北上市出身。東北大学医学部を卒業後、青森県十和田市立中央病院にて研修。桜新町アーバンクリニックで在宅医療専門医取得後、2011年から那須塩原クリニックで在宅医療に従事。2019年より現職。

在宅医療を支える医師の素顔をおとどけします

The doctor's natural face



「印象に残る事例は」

「二人暮らしの患者さんを看取ったケースです。今までに5名お看取りしました。どの患者さんも最期までとても穏やかでした。遠方に息子さんがいたケースもあり、息子さんが葛藤しながらも親の希望を受け入れていくのを見守りました。」

「在宅と病院での看取りの違いはどこにあるのでしょうか」

「病院に入院すると、病棟のスケジュールやルールの中で生活しないとできません。いつでも医療者が駆け付けてくれる安心がありますが、反面、とても不自由です。一方で、在宅では



日本在宅医療連合学会において「在宅医から発信する災害対策」というテーマで発表され、みごと優秀賞を受賞された

患者さんが主役です。その方が生きてきた過程で築いた人間関係や物に囲ま

れ、自由に時間を使うことが出来ます。私たち医療・介護専門職は外からやってくる脇役で、脇役の言うことに従うかどうかは主役が決める。不便や不安には脇役の力を使いつつ、物語の本筋は曲げず、人生を自分らしく完結することが出来ます。どちらにも利点・難点がありますが、『自分らしさ』や『自由』を大切にする方には在宅での看取りが馴染むと思います。」

「心に残った言葉はありますか」

「亡くなっていく患者さんがご家族に対して『これからも何かあったら先生に相談しなさい』とおっしゃってくれました。これってすごい信頼をもたらしたのだと思いました。しかし一方で、看取りの後にご家族と繋がり見守り続けることが出来るのか、という疑問も沸きました。そこから始まったのがグリーフケア（遺族ケア）の取り組みです。看取り後にお手紙を出したり、お線香を上げにうかがったりしています。また、『分かち合いの会イン那須』という会を作り、大切な人を失った方々と語らう機会をもうけています。」



医師になられてから数年劇団でお芝居をしたり、弾き語りのライブなどもしていた(写真中央)

「在宅医療に従事する医師を増やすには」

「まずはかかりつけ医の先生が、自分が外来で見ている患者さんを家で看取れるようになると思いいます。そのためには、患者さん家族が在宅医療を知ること、医師が安心して在宅医療に取り組める環境が必要です。医師にとっては特に365日24時間の対応が負担となりますが、医師会の先生同士が連携しサポートしあえるような仕組みができればいいですね。」

余暇

「プライベートでの過ごし方は」

「9月に第三子を出産しました。上の二人は男の子、今回は女の子なのでまた新たな楽しみができました。今までは戦いごっこばかりさせられてきましたが、これからはお菓子作りやお絵描きに合奏、いずれはガーデニングや温泉巡りを娘と楽しみたいと夢は尽きません。出産以降、家事と育児に追われて無趣味になったなあと思っているのですが、娘となら趣味を取り戻せるかもしれません。また、小学生の息子がどんなふうに妹の世話をするのか、息子たちには厳しい夫が娘にはメロメロになるのか、こちらも楽しみです。」



菅間在宅診療所

大黒町2-5

0287-73-5934

<https://www.hakuai.or.jp/zaitaku/>

道程

―歯科医師になるまでの道のりは

「二人の姉の下、末っ子長男として西那須野町で生まれました。祖父と父が歯科医だったので、物心ついたところから当たり前前に歯医者になるものだと思っていました。個人的には心理学や物理学に漠然とした興味がありました。」

たかの 高野 まさみつ 勝光

歯科医師

高野歯科医院

「大学に入るまでは三島小学校、三島中学校から黒磯高校と那須塩原市内で過ごしました。中高時代はテニス部に入っていたのですが、バンドにはまっぴいで帰宅部のようなものでした。楽器はギターを弾いていました。18歳の時に東京で1年間、実家でもう1年浪人しているうちに、広大な北海道の解放感に憧れ、北海道医療大学に入学しました。大学に入学した後、小さいころから当たり前だった歯科医師になることへの疑問が沸き上がり、大学1年生を2回留年しました。3回目の1年生のときに、台湾人の同級生から台湾旅行に誘われました。その旅行中に、ふと歯科医師として働く自分のイメージが浮かび、あらためて歯科医師になることを決意しました。それか

らは、卒業まで一直線に進みました。自分のいた大学では、入学して6年間ストレートに卒業して国家試験に受かり歯科医師になれる人は半分くらいしかいなかったのです、留年自体はあまり珍しくはないのですけれど。」

―歯科医師になられてからの道のりは

「大学を出て歯科医師の資格を取得した後は、同じ大学の大学院に進みました。バイトで臨床をしながら主にインプラントの研究をしました。大学院を出た後は、栃木県に戻り宇都宮市の歯科医院で半年勤務したあと、6年前に現在の歯科医院を開業し、その後2年間は父親と一緒に働きました。開業時点では、入れ歯や小児への対応などあまり自信もなく心配だったので、あれこれ学びながら経験しているうちに何とか少しずつ自信をもてるようになってきました。」

―どのようなお父様でしたか

「父は私が院長を務める歯科医院とともに仕事をするのが夢だったようなので、2年間一緒に働くことで親孝行ができたような気がします。父は79歳で亡くなったのですが寝たきりになるまで仕事は続けていました。歯科の細かい作業がとて好きな人でした。若いころは優等生だったようです。私の学生時代に勉強を教わると、『始業初日に教科書をもたらってきたらそれをすぐに覚えちゃえばいいんだよ』と身もふたもないアドバイスをもたらったことを覚えています。私の実力がわかった頃からは、『高校ぐらいは出るよ』程度のアドバイスに変化しました。」



栃木県那須塩原市出身。北海道の北海道医療大学を卒業後、同大学大学院にて研鑽を積む。その後宇都宮市の歯科医院勤務を経て、高野歯科医院を開業。現在、西那須野地区の在宅歯科を担当されている。

在宅医療を支える医師の素顔をおとどけします

The doctor's natural face



高野先生(右端)と診療所スタッフの皆さま。遊び心あふれる明るい雰囲気診療所でした

診療

「歯科医師として心がけていることは

「歯科治療の場合、お金をかけることが良い治療につながるかという点、必ずしもそうではない場合もあります。できるだけ公的保険で賄えることをきつちりと提供しながら、患者さんにもブラッシングや食べ物にも気を付けていただき、『抜かない』『削らない』『痛くない』治療を心がけています。細かい部分では、歯の寿命を延ばすため大切な神経を残せるよう、精密なルーペをつかって細かく丁寧に治療をしています。神経を抜く治療と比べて時間と手間は相当にかかります。神経を取るような手早く終わる治療の方が診療報酬としては高いのが現状です。患者様の状態によっては麻酔を使わないレーザーを使用しています。麻酔を使う場合でも表面麻酔から段階的にし、ピンチングテクニック（頬つべたを引っ張り針に寄せながら刺す技術）を使い、できるだけ痛みを軽くできるように工夫をしています。歯周病や口臭に悩んでいる患者さんの場合、抗生薬の使い方を工夫することで短期間で劇的によくなることもあります。歯科医師として以外の社会貢献も考え、先々は保育士さんを雇って、低料金で待機児童をいつでも受け入れられ



る赤字覚悟の託児所を開設したいとも思っています。ただし、その分は歯科で稼ぐ必要があると考ええると、中々実現は難しいのかなとも思います。」

葛藤

「どのような形で在宅医療に携わられていますか

「西那須野地区における在宅歯科診療は私が担当していますので、歯科医師会に依頼があれば私が訪問することとなっています。訪問機材も歯科医師会からお借りすることができます。しかし、これまで依頼があった中で訪問したのは1件です。他の方は当院がバリアフリーであることを伝えると来院してくださいました。また、人手が足りないことで中々出ていくことが難しいのも現状です。以前から訪問診療には魅力を感じていましたが、研修期間中に寝たきりの方の所へ訪問した際、医院とは全く違う環境で治療することの大変さと難しさを知りました。入所施設から依頼を受け、入れ歯の修理に行くこともあります。しかし、在宅歯科診療の請求方法などいまいち理解

できておらず、ボランティア感覚で行っている状態です。外来に来ることができない重い要介護度の方や、施設に入所している方の大きな楽しみである食べることを支援できるようにもつと関わればと思っています。全国的に見ると、在宅医療を専門とした歯科医院も出て来ており、社会からのニーズは高いのだと感じています。今は私一人で外来診療をしており、手いっぱいなのですが、代診の先生に来ていただけるようになったらもっと訪問もしていきたいなと思います。」



大学時代を過ごした北海道への家族旅行の一枚。
北海道の雄大な自然が大好き

余暇

「プライベートでの過ごし方は

「細かい作業がわりと好きで、娘とビーズ作業をしたり一緒に小さなお城を作ったりしています。休みの日は出かけるのも好きですが、一人で過ごす際は経済や歯科関係のDVDを観たり本を読んだりして終わります。学生時代から音楽は好きで、バンド活動をしていました。もしも歯科医師になつていなかったら今頃アルバイトをしながらバンドマンをしていたかもしれません。数年前に娘がピアノを習い始めるのと同時に僕も始めました。現在はジャズを練習中です。」



高野歯科医院

東三島2丁目79-2

0287-36-5590

<http://takanodental.com>

道程

―医師になるまでの道のりは

「栃木県足利市で生まれ、高校を卒業するまで過ごしました。小・中学生の頃は劣等感が強い子どもでした。高校に進学し、それを払拭するために医学部に入って医師になろうと思い、勉強を頑張りました。その成果が実り、山形大学医学部に合格し、入学することができました。」

石川純一 医師

那須こころの医院

―精神科を専門としたきっかけは？

「幼い頃から心配事が頭から離れず、家の施錠や火の始末などが気になって仕方がなくなり何度も確認に戻るなどの強迫観念、強迫行為に悩み、抑うつ、的になった時期がありました。ある日、大学の講義で精神疾患の治療法の一つである森田療法を学び、これは自分の症状の改善に効果的なのではないかと、自分自身で実践してみました。すると徐々に症状に対処することができるようになりました。このような治療法を同じ悩みがある方にも提供し、役立てばいいなと思い精神科を専門とすることにしました。」

―森田療法について教えてください

「森田療法は、我が国生まれの精神療法です。西洋の精神療法のように過去の心の傷や考え方の歪み等の原因を追究し、それを治療したり修正するよう治療するという考え方は違い、不安などを悪者扱いせずありのままに受け入れながら、生活の中で必要な行動に手をつけられることを目指す治療です。パニック症、不安症、強迫症、身体症状症などの神経症性障害が主な適応ですが、薬物療法だけでは改善しにくい慢性うつ病、慢性疼痛など幅広い疾患、分野にも応用されています。」

―医師となられてからの道のりは

「大学を卒業した後、山形大学病院の精神科で2年間研修をしました。大学病院では主に軽症のうつ病の治療に携わりました。その後、山形県内の二つの医療施設で統合失調症等の患者の治療に従事しました。山形県での生活が10年経ち、故郷の栃木県に戻りたいと思いました。反面、東北の風土もとても気に入りがたく思っていました。なので、栃木県の中でも東北に近いと



栃木県足利市出身。山形大学医学部医学科を卒業後、山形県の数か所の医療機関にて研修の後、栃木県に戻り那須高原病院にて勤務。平成30年に那須塩原市方京に那須こころの医院を開業。

在宅医療を支える医師の素顔をおとどけます

The doctor's natural face



「大学を卒業した後、山形大学病院の精神科で2年間研修をしました。大学病院では主に軽症のうつ病の治療に携わりました。その後、山形県内の二つの医療施設で統合失調症等の患者の治療に従事しました。山形県での生活が10年経ち、故郷の栃木県に戻りたいと思いました。反面、東北の風土もとても気に入りがたく思っていました。なので、栃木県の中でも東北に近いというところから那須町にある那須高原病院を勤務先に選びました。私が入職した時にそこでは森田療法は盛んには行われてはいませんが、森田療法を伝統的に行っている慈恵医科大学の教授が講演のために来院されたことが縁で慈恵医科大学の施設に通い勉強する機会を得ました。精神科では患者さんとのコミュニケーションが重要ですが、一日に多くの患者さんを診療しなくてはならずその時間がとりにくいというジレンマがあります。その施設の医師は的確に要点を見極めながら限られた時間で効率的かつ効果的にコミュニケーションをとり診療をされており、とても勉強になりました。今の診療所での外来診療につながる貴重な経験ができました。」



終始やわらかな表情でインタビューにお答えいただき、先生の優しいお人柄を知ることができました

診療

「開業することになったきっかけは？」

「那須塩原市に精神科の診療所がなかったことで困られている患者さんが多かったのですが、平成30年に那須塩原駅の近くに那須こころの医院を開業しました。先ほどもお話しした通り、精神科の診療は患者さんとのコミュニケーションがなによりも大切ですので、完全予約制の形で診療をしています。森田療法などの精神療法のエッセンスを取り入れながら、可能な限り薬に頼る量をセーブできるように心がけて診療をしています。」



診療所にはイメージキャラクターのアルパカが多数飾られていた。医院の配色もアルパカの色でした

「診療で心掛けていることは」

「症状のお話だけでなく、その背景にある生活の様子なども丁寧にお聴きし、総合的に治療方針を検討するように心がけています。また、薬物療法のみ偏らず、生活指導、精神療法を取り入れた診療を行っています。昨年、ある強迫性障害の患者さんを外来で診療していました。症状により休職を余儀なくされていましたが、薬物に頼りすぎず、日記をつけていただきそれを診療時に持参して頂きながら、良い行動に対して前向きな声掛けをすることで、症状の緩和を図ることができました。今ではあらたな資格を取得するための勉強に励むなど、うまく治療が進んだ印象深い患者さんでした。」

「在宅医療との関わりを教えてください」

「最近では精神科の患者さんにおいても、長期に入院するのではなく、退院して地域で生活していく時代になっていきます。しかし、入院していた方が社会に戻ってすんなりと生活していくことが難しいことも多いので、最近はそのいった方への在宅医療という支援が行われています。今後は那須地区においても精神科の患者さんの地域への移行が進められていくと思いますので、精神科領域の在宅医療の必要性は高い

のではないかと思います。特にひきこもりの方などは通院自体がハードルが高いことなので、こちらから訪問するという関わりも重要だと思います。しかし、今は外来診療で手一杯で余裕がない状況で訪問することはできていません。その代わりに近所の精神科を専門としている訪問看護ステーションと連携して、統合失調症に加えて筋力が弱ってしまった方や、不安が強くてあちこちに電話をし続けてしまう方など、訪問する必要がある患者さんのケアを依頼しています。患者さんも訪問した際に様々なことを話してくれるよう、それらの情報を電話で報告いただけるのはありがたいです。先々は、余裕を作れば私自身も訪問できればよいなと思っています。」

余暇

「プライベートの過ごし方について教えてください」

「小さいころから漫画が好きで今でも集めて読んでいます。最近はおつ病や強迫性障害などの精神疾患を体験された漫画家さんの作品も多く出版されています。体験された当事者さんのお話はとても貴重で、参考にもなりますのでクリニックの待合にも並べて手に取っていただいています。医師会の

会報にも漫画の書評を掲載させて頂きました。作者さんからお礼のサイン色紙を頂きうれしかったです。また、鉄道も好きで、日本全国の路線を乗り歩いています。一番気に入っているのは北海道の宗谷本線です。車窓から見える草原やサロベツ原野が印象的です。そのほか、ドライブやウォーキングも好きです。昨年、塩谷町で行われた40kmのウォーキング大会では完歩することができました。」



列車に乗り、全国津々浦々を旅行することが趣味のひとつ



那須こころの医院

方京1-16-2

0287-74-3233

<https://nasu-cocoro.com>

道程

―薬剤師になるまでの道のりは

「出身は旧黒磯市で黒磯高校を卒業し、仙台の大学に行きました。小さい頃に胃が悪くて地元の医院から大学病院を紹介され治療しました。その時に出会った薬剤師さんが長髪でシルバークのアクセサリーをつけ、ハーレーダビットソンで出勤する人でした。薬剤師って自由なんだなと思いました。もともと制服が嫌いでスーツを着ない職

業を選びたかったので薬剤師がよいと思いました。」

―薬剤師になられてからの道のりは

「病院で入院患者さんと直接話し、医師や看護師と接することで勉強したいと考えたので、大学を卒業したあと脳外科の病院に入職しました。そこには4年居ましたが、脳外科の他に整形外科や循環器の医師も診察に来ていて、とても勉強になりました。またその時、看護師や診療放射線技師さんともコミュニケーションを図りながら仕事をすることで、他職種の方との垣根も感じずに在宅医療や多職種連携会議にも参加がしやすかったです。」

―ひまわり薬局に勤めたきっかけは

「薬局の社長の弟さんが同じ大学出身で面識がありました。たまたま買い物をしていた時にばったりと出会い、その足で本店に連れていかれて、うちで働かないかとリクルートされました。その時はまだ病院の仕事を離れたくなかったので断りましたが、その半年後に再度新しい皮膚科のそばに薬局を立ち上げるから、うちにこないかと誘われ引き受けました。そこから18年今の薬局にいます。」

―在宅医療における薬剤師の役割は

「患者様が実際に生活するお宅に訪問して、薬の使用状況や効果・副作用や体調などを確認し、その方に合った薬物療法をお教えします。状況によっては、医師に薬の種類や用法・容量などの変更を提案することもありますし、ケアマネジャーさんなど他職種の方に薬に関する注意点などを報告や助言することもあります。」

―どのような方が対象となりますか

「訪問する上では医師が必要と認め、薬剤師に対して指示があることが前提となります。寝たきりや歩くことができない方や認知機能の低下で外出に介助が必要な方など、通院や薬局へ来ることが困難な方や、自宅での薬の服用や管理に不安がある方などが対象となります。」

―どの程度の頻度で訪問しますか

「患者様の状態により変わりますが、安定していれば月に1〜2回程度です。しかし、末期がんなどで体調に変動がある方や、痛みの強い方は薬の使用に変更があるので、随時訪問することもあります。」



たしろ たかふみ
田代孝文 薬剤師
ひまわり薬局 阿波町店

栃木県那須塩原市出身。東北薬科大学（現東北医科薬科大学）卒業後、那須脳神経外科病院に勤務。平成14年より現在の（有）白井薬局ひまわり薬局阿波町店の管理薬剤師として業務に従事している。

在宅医療を支える薬剤師の素顔をおとどけします

The pharmacist's natural face



普段はひまわり薬局 阿波町店で窓口業務に従事されている

訪問

「訪問での業務内容を教えてください」

「窓口業務の合間をぬって訪問しています。訪問内容としては、新しい薬を届けるのはもちろんの事、日頃の服薬状況や副作用、残薬を確認し、薬の効果や副作用などを丁寧に説明します。薬局の窓口よりも、患者様とのコミュニケーションの時間をしっかりと取れるのが訪問の良い点だと思います。また、薬が飲みにくい場合には、補助ゼリーを使って飲みやすくしたり、大きなカプセルを粉末状に変更したり、飲み忘れが無いように一包化するという工夫もします。時には薬の数を減らすといった調整を医師に提案したりしま



気さくにお話をしながら、手際よくお薬の相談に応じていたのが印象的です

す。訪問後、医師やケアマネジャーなどに服薬状況や体調の変化を報告します。患者様が診察時に医師に伝えられなかったことを、かわりに伝えることもあります。」

「在宅医療はやりがいがありますか」

「患者様の生活の場に向いて直接コミュニケーションを取りながら、悩みを解決したり健康に過ごすことを支援できることや、多職種と協力しながらチームの一員として役立てることにやりがいを感じます。患者様のご自宅に訪問するようになって5年になります。毎日楽しいです。」

「市内で何か所くらい訪問を行う薬局がありますか」

「何か所かは把握していませんが基本的に2人以上の薬剤師がいる薬局は、訪問薬局として登録されているようです。年間で2〜3件しか訪問しない薬局もあれば、数多く訪問している薬局もあり訪問の仕方は様々です。」

「印象に残っているケースは」

「脳腫瘍の患者様で一晩中落ち着かない方がいました。余命1ヶ月もない状況で私服で訪問すると話を聞いて



毎週火曜日22:00~放送!!
嘉門雄三のやさしいひとり言
いつもひとりで放送しています。だから、ひとり言。
ネットラジオ放送局 Nasu-Waveでラジオパーソナリティを担当されている

くれないのですが、白衣を着て出向くとその晩から薬を飲んでくれるようになりました。訪問して一番大変なケースでしたが、なにか糸口があると介入が進むことがあるということをおぼせていただきました。」

「在宅医療における薬剤師の課題は」

「地域の訪問に携わる薬剤師が少ないのもっと増えればいいなと思います。訪問薬剤師がより多くの患者様に認知されることが希望です。」

余暇

「プライベートの過ごし方について教えてください」

「NASU-WAVEというネットラジオ局で『嘉門雄三』という名前

でユーチューブライブをしています。きっかけは同級生が飲食店をはじめ、その時の宣伝ツールとしてインターネットを使いはじめ、それに参加したことでした。そのうちにこの地域で音楽をしている連中と地域を活性化するための活動を一緒にはじめました。今では青年会議所などのイベントをお手伝いをするようにもなりました。自分でもたまに歌ったり演奏したりしています。他のミュージシャンが作った曲をまるで自分で作ったかのような顔をして弾き語っています。これからは、今関わっている那須塩原市の在宅医療を推進する事業でユーチューブなどを使った広報活動のお手伝いなどもさせていただければと考えています。」



ひまわり薬局 阿波町店

阿波町99-17
0287-73-2050



在宅医療 interviews

2021年春号

2021年 3月発行

【発行】

那須塩原市

【配布方法・配布場所】

市役所、医師会、医療機関
介護事業所他

【配布地域】

栃木県那須塩原市・大田原市
那須町他

STAFF

◎企画・デザイン・編集・写真

那須塩原市在宅医療・介護連携推進事業
多職種連携会議

『在宅医療への関心を深める』班

磯 勝彦 歯科医師

(磯歯科医院)

黒崎 史果 医師

(菅間在宅診療所)

渡邊 恵美 保健師

(地域包括支援センターさちの森)

秋葉 喜美子 看護師

(国際医療福祉大学 看護学科)

高橋 秀介 理学療法士

(菅間記念病院)

鈴木 理恵子 保健師

(那須地区在宅医療介護連携支援センター)

◎似顔絵

ひでお

(似顔絵ボランティア)

訪問歯科医 I の徒然日記

栃木県での訪問歯科診療は、栃木県歯科医師会の中にある「在宅医療・連携室」を通しての依頼を基本にしています。

訪問の依頼が入りますと、まず、患者さんに連絡を入れます。お互いの予定を合わせて訪問日を決め、グーグルマップで訪問先の位置を確認し、機材をそろえて出かけます。訪問する範囲に16キロ圏内という決まりがありますが、超えることもしばしばあります。

今日の訪問は那須町芦野地区の「ぼつんと一軒家」。地図案内の通りに向かったはずがそこには家がなく…「あれ？道を間違えたかな(?_?)」

でも、そんなところにも飛脚マークの〇〇急便はくるんです(優秀な日本企業)。ドライバーさんから運よく道順を聞いて、迷いながらも訪問先に到着。そこには畑で一人の老人が元気良く野良作事中。

私 「まさか、この方が依頼主ではないよね(?_?)」

老人 「先生、おねがいします(^_-)-☆」

私 「……(°。°)」

治療も無事(?)に済んだ後、患者さんからひと言

老人 「先生、お陰様で今夜は焼き鳥屋に行けますよ(^_-)-☆」

私 「……(°。°)」

この方って在宅医療の対象かな？…こんな事も間々あります…よね？



※写真はイメージです

この地域の在宅医療を推進するためのインタビュー紙の第四号を皆様にお届けすることができました。本号では、令和2年になって、新たに在宅医療の世界に飛び込んできた眼科の大原医師、在宅医療の魅力に惹かれて専門医として活躍されている黒崎医師、西那須野地区の在宅歯科診療を担当されている高野歯科医師、外来診療が多忙な中で他職種と連携する工夫により在宅療養者を支える石川医師、薬局を飛び出して患者宅への訪問のみならずラジオパーソナリティと多彩に活躍されている嘉門雄三こと田代薬剤師のバラエティーに富む5名の方々に登場いただきました。今回も、インタビューが進む中で、インタビュアーである黒崎医師からの眼の症状を持つ患者さんの相談を受けて、眼科の大原医師の訪問がはじまるという専門の異なる医師同士の間で連携が生まれる瞬間を目の当たりにすることができました。改めてインタビューの役割を引き受け受けてよかったと思っただ次第です。

編集後記

似顔絵



今回、先生方の似顔絵を描いていただいた那須塩原市在住の「ひでお」さんです。デイサービス等で似顔絵ボランティア活動中

希望の方は下記までご連絡ください

iroenpitu87@yahoo.co.jp